



冬の

あそびと

保育

鷺山 さき
まつむらい さむ
笠井 久子
守田 キヨカ

子供の生活はそれ自体が遊びである。何故遊ぶのかなどと自ら問はうとしない。まして遊ばねばならぬなどと考えない。遊ぶこと自体が面白くてたまらないのである。遊ぶことの嫌いな子供があるならば、どこか異常な子供だろう子供らしくない子供だろう。子供の遊びの中には、子供の生活自身が打ちこまれている。教育という遊びとはまるで縁遠いもののように思われるが、教育は

子供の生活を離れては考えられないものである。教育は子供の生活の中に入って来なければならぬし、子供の生活の中で行なわれなければならない。とすれば教育は子供の遊びと縁遠いものではない。むしろ遊びの中に教育が見出されねばならないだろう。まして遊びと仕事とのけじめのはっきりつかない幼児期においては、生活・遊び・教育は切り離せないものである。

子供が遊ぶ時の熱心さ、嬉しさ、楽しさでもって、大人が仕事に向うことが出来たならば、どんなに素晴らしい仕事が生れることだろう。好奇心にみちて、楽しく仕事をする時に子供は最もよく学ぶことが出来る。教育の効果はその時に最大である。遊びの中で学ぶことは、子供のからだの隅々までしみこんでゆく。

絵を画くことも、歌うことも、製作することも、義務となり仕事となる。その中から子供の生活と子供の生命が奪われてしまう。教育の場の中の子供の生活も、喜びと熱意と豊かさにと満ちあふれたものでありた

い。街頭で、家で、又園庭で、子供の遊ぶ姿を時々眺めてみよう。身と心を傾けて遊んでいる子供の姿の中に、子供の具体的な生活を発見することが出来る。

子供の日常の遊びの中から教育の地盤としての子供の生活を見出すこと。そしてそれをもう一步発展させてゆく工夫をすること、を考えねばならないだろう。教育の歩みの一つの段階として具体的な遊びの姿を眺めよう。

冬の北海道

鷲山 さき

降っては消え降っては消えていた雪が、すっかり凍つきかたまっ*て*いわゆる根雪ねゆきになっ*て*しまうお正月前後には、和服を着た人々は皆雪下駄ゆきぞうりというのをはく。齒の下は止めの

金具が打込んであるので歩くとキュツと音がして、こんな時の気温は勿論零下である。いくら着込んででも外出は寒くて骨が折れる。だのに北海道の子供達の冬の代表的な遊びと言えばスキー、橇、竹スキー、それから近頃急に普及したスケートである。

スキー

スキーは雪の深い山村などでは単なる遊び道具どころではなく、学校に行くにもスキーお母さんのお使いで配給物をとりに行くにもスキーと言った具合で、

スキーは生活の必需品である。幾日かの吹雪が終ると北海道の天空が雲一つない紺青に牙え渡り、大地は野も山も白銀一色に輝き渡ってこういう日が何日も続く。このような快晴の日和を併人は深雪晴ふかゆきはらといっている。こちらの雪は内地の雪とちがってとてもさらさらしている。雪で着物が濡れる等ということは絶対にない。そのような雪の上にスキーをはいて乗るとスキーごと足首まで雪にもぐる。しかし、ストックを後方に向けてグンと突くとスキーはスィーと沁る。東京の人達には想像

出来ない程子供達は軽快に沁る。紅潮した頬を寒い空気ですぐに紅しながら、友達と呼交したり喚声をあげたり、或る時は鈴をつけた馬橇を追いつ追われつしながら、又或る時は雪煙を蹴たてて野山の一本道を山の斜面を飛ぶように沁る。この子供達が青年になれば早速山岳スキーをやるであろうしやがては団体スキーの選手にもなれる。然しスキーが生活に必須でない都市でも子供達はスキーで遊ぶ。幼稚園の子供達ですら自分の身長より長いスキーを使いこなして自分の家の附近の坂で打ち興じながら沁っている。でも市街地ではスキーをすべての子供が持っているわけではないむしろ持っているいない子供の方が多いと思

橇

市街地の子供達に一番普及しているのはスキーよりもむしろ橇である。之は坂道その他を踏み固めた根雪の上を沁るもので男女を問はず三つ四つの子供もやるし中学生位もやる。一人乗りの橇から四人乗りのものまである。大部分は一人乗りだ